錦城高校新聞

題字 井口 文章

再刊 第２８５号

印刷・発行

錦城高等学校新聞委員会
編集室 2019

みんなでつくる
錦城高校新聞

一面：55回生 スキー修学旅行の足跡
陸上部＆教員 駅伝出場
二面：修学旅行特集
安比での日々をプレイバック

白銀の世界で作る思い出

55回生 安比へスキー修学旅行

1月28日（月）から2月1日（金）までの5日間、2年生は錦城で初めてとなる岩手県の安比高原スキー場に修学旅行へ行った。5日間の様子を裏面の特集と合わせてお届けする。

錦城初の安比へ

盛岡駅に到着すると雪が舞っており、東京とは一味違う寒さに生徒からは戸惑いの声も上がった。

バスでホテルに移動しスキーウェアに着替えた後、駐車場で開校式が開かれた。インストラクターの方々への挨拶では「この4日間の内にみんなで滑れるようになりたいです」とHR委員長の小山奈緒さん（2G）が意気込んだ。

開校式が終わると2年生は男女で技術別の60班に分かれ、早速ゲレンデへと繰り出した。慣れないスキー靴を履き、歩きづらそうな様子も見られた。初心者はスキー道具に慣れるために緩やかな斜面で滑る練習を、経験者はリフトに乗車しインストラクターに続いてコースを滑った。

1日目、2日目ともに天候がすぐれなかったが、3日目はすっきりとした晴れになり、ゴンドラに乗り頂上まで行った班も多かった。展望台へ上った班は樹氷を背景に記念撮影などをした。

スキー場での昼食は配られた食券を使って、ゲレンデに隣接したレストハウスでそれぞれがラーメンやピザなどの中から好きなメニューを注文し、班員と食事を楽しんだ。

4日目の午後のフリー滑走では友達を誘い、利用可能なコースから好きなコースを選んで滑る姿が見られた。

スキー経験者も未経験者も思いきり楽しんだ５日間

両手を広げ、安比の風を感じる

別れを惜しんだ閉校式

閉校式では前日の夜に班員で寄せ書きをした班旗と記念品のタンブラーを4日間お世話になったインストラクターの方へ渡した。閉校式が終わるとインストラクターのもとへ駆け寄り、別れを惜しむ生徒たちの姿も多く見られた。

スキーは初めてだったという水島萌衣さん（2L）は「最初はたくさん転んだけど、最後にはスムーズに滑れるようになりました」と嬉しそうに話す。夕食後にはHR委員が企画から進行までを行ったレクリエーションを、6クラスごとに前半、後半と分かれて催された。

最後まで堪能 岩手の魅力

最終日の5日目は「小岩井農場」と「盛岡手づくり村」へ足を運んだ。

小岩井農場では小岩井農場の職員がバスガイドとなった近代遺産観光に参加、大正時代に建てられたという倉庫や現在も使用されている牛舎などの重要文化財を間近に見ることができた。またかつての診療所の前では、農場内に学校や警察署もあり、ひとつの村のようだったという説明を聞き、生徒からは驚きの声が上がった。売店ではミルクソフトクリームや飲むヨーグルトが販売されており、多くの錦城生が購入していた。

盛岡手づくり村では竹細工や木工など、6つのコースに分かれて伝統工芸品の手作り体験をした。限られた時間の中ではあったが、職人さんたちに教えてもらいながら、それぞれ作品を完成させることができた。

石塚先生はどう評価？

上野駅にて解散した直後、今回の修学旅行を終えた心境をスキーチーフの石塚友規先生に今回の修学旅行を100点満点で評価してもらうと「時間を守ってくれたみんなの動きには120点をあげたいです」と話した。5日間の修学旅行を振り返り、竹本龍宏くん（2D）は「普段できない体験ができてよかったです。また安比へ行きたいです」と感想を語ってくれた。

修学旅行で学んだ経験を次の学年でも活かしていこう。

陸上部冬の小平を走る！

先頭を走る一般男子の部
１区伊藤緑くん（１Ｌ）

錦城から計7チームが出場

2月3日（日）、第39回こだいら市民駅伝大会が開催された。小平市中央公民館前からスタートし、3・1キロメートルのコースを4区間、計12・4キロメートルを128チームが走り抜ける。冬の快晴の下、沿道からはあたたかい声援が飛び交い、それに応えるようにランナー達は熱戦を繰り広げた。錦城からは一般男子の部に陸上部が2チーム、教員と陸上部員の混合チームが1チーム、教員チームが2チーム、一般女子の部に陸上部から2チームがそれぞれ出場した。

襷を受け取る一般女子の部
２区 田中珠乃さん（２Ｄ）

結果は一般女子の部で3位に入賞。さらに第1区で区間賞、第2区では区間新記録を更新などと好成績。一般男子の部においては2チームそれぞれ6位、10位、混合チームが25位、教員チームが27位、35位という結果を残した。

大会を振り返って

第1区区間賞を獲得した玉利麻祐さん（2J）と第2区区間新記録を更新した田中珠乃さん（2D）に話を聞いた。

修学旅行直後にも関わらず足の疲れは感じなかったという玉利さん。「大会前々日から肺活量を増やし、大会に向けて備えていました」と話した。

田中さんは「区間新記録は狙えると思っていましたがタイムは12分6秒と、11分台に届きませんでした。でも冬の練習の成果が発揮されたので満足しています」と振り返る。また、チームとしては入賞を果たすことができたが、1位を逃してしまい悔しかったと口を揃えた。

後輩に向けて「陸上はほとんどが個人戦ですが、駅伝は団体で戦える競技なので緊張せずに楽しんでほしいです」とエールを送った。（柊・菘）

モルモットの里親求む！

生物部は昨年の11月23日（金）に誕生したモルモット一匹の里親を募集している。部員の赤尾凜さん（1G）によると、食事はチモシーという牧草とモルモットフード、水を与えており、キャベツやりんごも食べるそうだ。飼育時の注意として、適切な温度調整と身を隠すことができる家を用意すること。また、毛が抜けて皮膚が赤くなっているときはアレルギーのサインで、鼻水が出て動きが鈍くなっているときは風邪のサインだそう。体調にも気を配って欲しいと話した。

最後に里親になってくれる人へ「亡くなるまで可愛がってあげてください」とメッセージを送った。

興味を持った人は生物部員か顧問の阿部一郎先生まで。（蓮）

チャームポイントは
ごはんを食べるときの口の形

毎年恒例 食堂キャンペーン実施

1月28日（月）から2月1日（金）までの2年生修学旅行期間中、食堂では毎年恒例の「お留守番キャンペーン」が行われた。食堂のメニューをいつもより安い値段で購入できたり、乳酸菌飲料が無料で付いてきたりする特別期間だ。

期間中に友達と食堂を利用していた東山叶萌くん（1D）は「これからも続けて欲しいです」とコスパの良さを語る。一方で「安いメニューを事前に教えるなどもっと分かりやすくしてほしい」という声も。関口智大くん（1D）は「メニューが安くなっていることは知らなかったので、明日も来たいです。キャンペーンたまんねえよ！」と絶賛した。

このキャンペーンは「2年生の修学旅行中に1年生にも何か楽しみがないと」という思いから15年前に始まった。食堂チーフの吉川康子さんは「今年は昨年から利用者が100人も減ってしまい、余った乳酸菌飲料を土曜日も配ることにしました」と話す。同時に、もっと前からキャンペーンの宣伝をしておくべきだった、と反省点を口にした。

最後に「日替わりランチは多様なメニューを一度に食べられるサービスメニューなので、朝一番に食券を買ってぜひ食べてみてください！」と笑顔で呼びかけた。（槿）

キャンペーン中の食堂風景

1年生 古典文化に触れる 百人一首大会、今年も開催

2年生が修学旅行で不在となっている中、1月30日（水）のLHR、第一体育館で百人一首大会が行われた。クラスで6・7人からなるチームを作り、「春」「夏」「秋」「冬」の4つのグループに分かれる。それぞれ別のクラスのチームと戦い、競技終了後クラスごとの合計枚数を競うというルールだ。

当日はチームの中から前半後半それぞれ4人ずつ選出。後の行事は熱狂のまま幕を閉じた。（梅）

向かい合っての真剣勝負

敵味方合わせて8人が取り札を囲んだ。

大会が始まると一首読み上げられるたびに、拍手が起こったり、歓声があがったりと大盛り上がり。

合計で60首が読み上げられ、最終結果は230枚を獲得したJ組が1位、そして223枚のM組が2位、219枚のK組が3位に輝いた。

個人最多となる39枚を獲得した塚田凛さん（1F）は「大会前から百人一首は全部覚えていました。もしまた機会があったらやりたいです」と振り返る。司会進行を務めた古典担当の田代直之先生は「みんなでワイワイしながら気軽に古典文化に触れられるいい機会になったと思います」と笑顔で話した。1年生最

むらさき草

この道を入ったらどこに行けるんだろう。毎朝自転車をこぎながら、小道を見るたびに思ってしまう。何か新しいことが始まるかもしれない、と▼くまのプーさんは「プーと大人になった僕」で、100エーカーの森から扉1つでクリストファーロビンの住むロンドンに来てしまった。大人になって「大切なもの」を忘れてしまったクリストファーロビンのために▼ピーターパンは窓からダーリング家に忍び込み、3兄弟を大人にならない国「ネバーランド」に連れて行ってしまう。大人になったら気がつけない、日々の小さな冒険から2つの物語は始まる▼2018年7月30日、私はホームステイプログラムに参加し真冬のオーストラリアに降り立った。最後の週末、ホストファミリーとショッピングに出掛けたときのこと。ある市場でホストマザーが「これは今の私の気持ち」とくまのプーさんのある言葉を指差した。"As soon as I saw you, I knew an adventure was going to happen."とても楽しかったわ。ささやかな冒険をありがとう。そう、言ってもらえた気がした▼今も連絡をくれるホストファミリーたちは、どんな時でも私の英語を最後まで理解しようと努めてくれ、日本語を学んでいたある女の子は「英語を話すより日本語を話す方が好き！」と楽しそうに話してくれた。誰もが色んな国に深く興味を持ち、家族のようにフレンドリーなオーストラリア。彼女らと触れ合ってもっと色んな国を見てみたい、色んな人に会ってみたいと思うようになった。チャレンジすることで世界は広がる、とオーストラリアの家族、友達が教えてくれた▼身の回りは常に新しいことで溢れる子ども時代。たくさんのことに挑戦できる、そんな今の時期にしか出来ないことがきっとあるだろう。新しいことを始める時はいつも不安が先走る。でも踏み出した先には、未だ見ぬアドベンチャーが広がっているはずだ。（槿）

大会報告

女子バスケットボール部
2月3日（日）
▽椿CUP
予選トーナメント
Dブロック予選通過

陸上部
2月3日（日）
▽第39回こだいら
市民駅伝大会
一般女子の部
第3位
第1区区間賞
玉利麻祐（2J）
第2区区間新記録更新
田中珠乃（2D）

生徒会 動静

1.27～2.12

2月5日（火） 代議員会
2月8日（金）
体育学芸委員会
2月12日（火） HR委員会
中央委員会 常時活動中

小岩井農場の魅力に触れる

民間最大の農場

小岩井農場は日本で民間最大の農場だ。その中にある、農場本部事務所や天然倉庫などの建物は文化財に指定されている。錦城生は各クラス、バス内でバスガイドの方の話を聞きながら、非公開エリアも含む農園内を巡った。

ガイド後、錦城生のお土産を買ったり、ソフトクリームをおいしそうに食べたりする姿が見られた。また、農場内にはかまくらもあり、中に入ってそれぞれ冬の小岩井農場を楽しんでいた。

小岩井農場のいいところ

小岩井農牧株式会社観光部部長の戸田敦さんに取材した。戸田さんは盛岡市出身で、農場のようなのんびりとした場所で働きたいと思い、ここで仕事を始めたそう。小岩井農場の良いところは、四季がはっきりとしているところ。冬にはライトアップもされ、観光客に「イルミネーションがきれい」や「メニューがおいしかった」と言われると嬉しいと誇らしげに話した。

「通勤時の景色に癒されます」と戸田さん

最近は外国人の観光客も多く、年間2万人ほど。冬は外国人観光客のほうが日本人の観光客よりも多い。東日本大震災で一度観光客が減ってしまったが、今では震災前まで戻ったそうだ。

おすすめのお土産は

戸田さんおすすめのお土産はミルク館のチーズ。とても濃厚で、ワインにもよく合うという。戸田さんは「グリーンシーズンも彼氏彼女を連れて来るなどして、また来てください」と話した。（英）

小岩井農場の売店で販売されているソフトクリーム。新鮮な牛乳を使った、濃厚な味が特徴のソフトクリームは、くちどけがとってもなめらか。生徒は「寒い」と口々に言いながら、列に並んで購入したソフトクリームの味は格別。みんなでストーブを囲んでいただきました！

竹細工

岩手県の「すず竹」を使用した竹細工。すず竹は丈夫でしなやか、竹細工にはとても適しているという。生徒たちが座るブルーシートの上には水の入ったバケツと竹かごの土台となる部分、すず竹が用意されていた。

生徒たちは用意されていた材料を使い、竹かごを編んでいった。竹は乾くと曲げにくくなるため時折、バケツの水をつけながら編み進めていった。思うように作業が進まず悪戦苦闘する様子も見られたが、みんな時間内に完成させることができた。

竹細工を教えてくれた「しばたこうげい」の柴田禮子さんは「また岩手に来てくださいね」と錦城生にメッセージをくれた。参加した生徒は「修学旅行の思い出として大切に使っていこうと思います」と話した。（加）

手づくり村で感じる岩手の伝統

手づくり村とは・・・

岩手県の工芸品と触れ合える施設だ。「手づくり工房」では岩手県の工芸品を職人からの指導を受けながら、手作り体験をできる。

今回は陶器・陶器絵付・藍染・竹細工わら細工・こけし絵付・チャグチャグ馬コ・金のべべコの手作り体験のコースの中から、好きなコースを選んで体験を行った。ショップでは職人の作った商品を買うこともできる。

チャグチャグ馬コ

チャグチャグ馬コとは、滝沢市の鬼越蒼前神社から盛岡八幡宮の約１３キロを４時間かけて練り歩くお祭りの際に、着飾る馬のこと。農耕に欠かせない大事な家畜として、勤労を感謝するために馬を着飾る。また、チャグチャグ馬コの鈴の音は「残したい音１００選」に選ばれている。

まず、白、ピンクなどに塗られた馬の中から好きな色を選ぶ。赤の塗料で耳、鼻、口を塗り、緑の塗料で飾りの部分を塗る。飾りと、自分で選んだ布を接着剤と釘で固定する。たてがみと尻尾をもとからある穴に差し込み、接着剤で固定。最後に自分の好きなように目を描いて完成。生徒は「飾りが凝っていて、綺麗でした」と感想を述べた。（英）

ちょこっと紹介！岩手の方言

インストラクターの中にはスキーだけでなく方言を教えてくれる方もいました。ここでは盛岡市出身のインストラクター「カズさん」から教えてもらった方言を紹介します！

あの流行語を岩手の方言で言うと？

「そだねー」→「んだなは」

「んだなす」とも言うが、「なは」の方がやわらかい印象を与えるそうだ。

「じぇじぇじぇ」→「じゃじゃじゃじゃ」

２０１３年の朝ドラ『あまちゃん』で岩手県三陸地方の方言として有名になった「じぇじぇじぇ」だが、同じように驚いた時、盛岡方面では「じゃじゃじゃ」と言うそう。

実はアイヌ語が起源

安比という地名はアイヌ語が起源。生活に溶け込んでいる言葉が多く地元の方も起源を知らない人は多い。

「ふきのとう」→「ばっけ」

春先になると芽を出す春の風物詩。やや苦みのある「ばっけみそ」が有名だ。教えてくれたカズさんは長い間、アイヌ語だと知らなかったと言う。

「水に浸かる」→「かっぱる」

アイヌ語で水が溜まる場所を「かっぱ」ということからきている。遠野物語で有名な「河童」の語源とも。（加）

つるっとさっぱり！

ご当地盛岡冷麺

盛岡三大麺の１つである「盛岡冷麺」。ルーツとなっている朝鮮の咸興冷麺とは違い盛岡冷麺はそば粉を使っていないのが特徴です。スープは牛骨で出汁を取っていて、トッピングにフルーツをのせるのが一般的。今回はパイナップルでしたが、リンゴやスイカをのせることもあるそうです。

郷土料理八幡平の店員さんによると「まず何も入れずにスープを飲んでから辛味を入れて食べるのがオススメ」だそう。コシのある麺にすっきりとしたスープがよく絡み、クセになる。岩手に行ったときにはぜひ食べてみては？（蘭）

55回生スキー修学旅行 In 安比

インストラクターに聞く、スキーへの思い

楽しいと言ってくれたときがやりがいです

女子班担当のインストラクターの畑田美奈子さん。地元が岩手県のため３歳でスキーを始めたそう。小学校でもスキー教育が導入されており、幼いころからスキーに慣れ親しんで育った。そんな畑田さんがインストラクターを志したきっかけは、２０歳過ぎにスノーボードを習ったことだという。その時のインストラクターのおかげでスノーボードが上達し、魅了されたことから「自分もスキーやスノーボードを指導して生徒に上手になってもらいたい」と思い３０歳の時に資格を取得した。

インストラクター歴１０年となった今、同じ言葉でも人によって感じ方が異なるためどういう風に伝えるかが難しいと感じるそうだ。やりがいを感じる時は「生徒が上手になって、すべるのが楽しいと言ってくれた瞬間」と話してくれた。（泰）

生徒たちと滑るのも楽しいです

「スキーが楽しいから」という理由でスキーのインストラクターを始めた、男子班担当の佐々木俊春さん。小学生のときからスキーをやっていて、インストラクターの資格を取ったのは約３０年前。またスノーボードのインストラクターの資格も持っている。毎年多くの学校にスキーを教えているそうで、今シーズンは錦城が６校目だという。

インストラクターについて「１人で滑るのもいいけど生徒たちと一緒に滑るのも楽しい」と語る。また「だんだん上達していくのを見ていると面白いし嬉しい」と生徒とのスキー実習の楽しさを口にした。佐々木さんにとってスキーは「生きがい」。「生涯スポーツだから、これからもスキーを続けていきたい」と話した。

錦城生がスキーを終えた次の日も別の学校の指導をするという佐々木さん。錦城生に向けて「これからも『冬』をめいっぱい楽しんでほしい」とメッセージを送ってくれた。（蘭）

5日間のスケジュール	
1日目～3日目	スキー
4日目	スキー・レク
5日目	小岩井牧場・手作り工房

大空へ!!

並んで直滑降！

竹細工、上手に

出来ました！

55回生スキー修学旅行 思い出グラフティー

しろくまの先生の似顔絵作り

インストラクターの方へ
感謝の気持ちを班旗に

頂上には美しい樹氷が